

子供の病氣

———游亭に———

芥川龍之介

青空文庫

夏目先生は書の幅ふくを見ると、独り語ごことのように「旭窓きよくそうだね」と云った。落款らっかんはなるほど旭窓外史きよくそうがいしだった。自分は先生にこう云った。「旭窓たんそうは淡窓の孫むそでしょう。淡窓の子は何と云いましたかしら？」先生は即座に「夢窓むそうだろう」と答えた。

——すると急に目がさめた。蚊帳かやの中には次の間まにともした電燈の光がさしこんでいた。妻は二つになる男の子のおむつを取り換えているらしかった。子供は勿論もちろん泣きつづけていた。自分はそのちらに背を向けながら、もう一度眠りにはいろいろとした。すると妻がこう云った。「いやよ。多加たかちゃん。また病気になっちゃあ」自分は妻に声をかけた。「どうかしたのか？」「ええ、お腹

が少し悪いようなんです」この子供は長男に比べると、何かに病氣をし勝ちだった。それだけに不安も感じれば、反対にまた馴れっこのように等閑とうかんにする気味もなかった。「あした、Sさんに見て頂いたけよ」「ええ、今夜見て頂いたこうと思つたんですけれども」自分は子供の泣きやんだ後のち、もとのようにぐつすり寝入つてしまつた。

翌朝よくあさ目をさました時にも、夢のことははつきり覚えていた。

淡窓たんそうは広瀬淡窓ひろせたんそうの氣だった。しかし旭窓きよくそうだの夢窓むそうだのと

云うのは全然架空かくうの人物らしかった。そう云えば確たしか講釈師くわうせきしに南窓なんそうと云うのがあつたなどと思つた。しかし子供の病氣のことは

余り心にもかからなかつた。それが多少氣になり出したのはSさ

んから帰つて来た妻の言葉を聞いた時だった。「やっぱり消化不良ですつて。先生も後ほ^{のち}どいらつしやいますつて」妻は子供を横抱きにしたまま、怒つたようにものを云つた。「熱は？」「七度六分ばかり、——ゆうべはちつともなかつたんですけれども」自分分は二階の書齋へこもり、毎日の仕事にとりかかった。仕事は不^あ相^い変^か撓^ぼどらなかつた。が、それは必ずしも子供の病気のせいばかりではなかつた。その中^{うち}に、庭木を鳴らしながら、蒸^む暑^{あつ}い雨が降り出した。自分は書きかけの小説を前に、何本も敷^し島^{しま}へ火を移した。

Sさんは午前に一度、日の暮に一度診^{しん}察^{さつ}に見えた。日の暮には多^た加^か志^しの洗^{せん}腸^{ちよう}をした。多加志は洗腸されながら、まじまじ

電燈の火を眺めていた。洗腸の液はしばらくすると、淡黒い粘うすぐろね液んえきをさらい出した。自分は病を見たように感じた。「どうでしょう？ 先生」

「何、大したことはありません。ただ氷を絶やさずに十分頭を冷やして下さい。——ああ、それから余りおあやしにならないように」先生はそう云つて歸つて行つた。

自分は夜も仕事をつづけ、一時ごろやつと床とこへはいつた。その前に後架こうかから出て来ると、誰かまっ暗な台所に、こつこつ音をさせているものがあつた。「誰？」「わたしだよ」返事をしたのは母の声だつた。「何をしているんです？」「氷を壊こわしているんだよ」自分は迂闊うかつを恥はじながら、「電燈をつければ好いいのに」と云

った。「大丈夫だよ。手探りさぐでも」自分がかまわずに電燈をつけた。細帯一つになった母は無器用ぶきように金槌かなづちを使っていた。その姿は何だか家庭に見るには、余りにみすばらしい気のするものだった。氷も水に洗われた角には、きらりと電燈の光を反射していた。けれども翌朝の多加志の熱は九度よりも少し高いくらいだった。Sさんはまた午前中に見え、ゆうべの洗腸を繰り返した。自分はその手伝いをしながら、きようは粘液ねんえきの少ないようにと思った。しかし便器をぬいてみると、粘液はゆうべよりもずっと多かった。それを見た妻は誰にともなしに、「あんなにあります」と声を挙げた。その声は年の七つも若い女学生になったかと思うくらい、はしたない調子を帯びたものだった。自分は思わずSさんの顔を

見た。「疫痢えきりではないでしょうか？」「いや、疫痢じゃありません。疫痢は乳離れちばなをしない内には、——」Sさんは案外落ち着いていた。

自分はSさんの帰った後のち、毎日の仕事にとりかかった。それは「サンデー毎日」の特別号に載せる小説だった。しかも原稿の締め切りきはあしたの朝に迫っていた。自分は氣乗きのりのしないのを、無理にペンだけ動かしつつけた。けれども多加志の泣き声はとかく神経にさわり勝ちだった。のみならず多加志が泣きやんだと思うと、今度は二つ年上の比呂志ひろしも思い切り、大声に泣き出したりした。神経にさわることはそればかりではなかった。午後には見知らない青年が一人、金の工面くめんを頼みに来た。「僕は筋肉労働者です

が、C先生から先生に紹介状を貰もらいましたから「青年は無骨ぶこつそうにこう云った。自分は現在墓がまぐち口に二三円しかなかったから、不用の書物を二冊渡し、これを金に換え給かえと云った。青年は書物を受け取ると、丹念たんねんに奥附おくづけを検しらべ出した。「この本は非売品と書いてありますね。非売品でも金になりますか？」自分は情なさけない心もちになった。が、とにかく売れるはずだと答えた。「そうですか？　じゃ失敬します。」青年はただ疑わしそうに、難有ありがとうとも何とも云わずに帰って行つた。

Sさんは日の暮にも洗腸をした。今度は粘液もずっと減へつていた。「ああ、今晩は少のうございますね」手洗いの湯をすすめに来た母はほとんど手柄てがらが顔おにこう云った。自分も安心をしなかつ

たにしろ、安心に近い寛くつろぎを感じた。それには粘液の多少のほかにも、多加志の顔色や挙動などのふだんに変らないせいもあつたのだつた。「あしたは多分熱さかが下るでしょう。幸い吐はき気けも来ないようですから」Sさんは母に答えながら、満足そうに手を洗つていた。

翌よくあさ朝あさ自分の眼をさました時、伯母おばはもう次の間まに自分の蚊帳かやを畳たたんでいた。それが蚊帳かやの環かんを鳴らしながら、「多加ちやんが」何とか云つたらしかつた。まだ頭のぼんやりしていた自分は「多加志が？」と好いい加減いに問い返した。「多加ちやんが悪いんだよ。入院させなければならぬんだとさ」自分は床とこの上に起き直つた。きのうのきょうだけに意外な気がした。「Sさんは？」「先生も

もう来ていらつしやるんだよ、さあさあ、早くお起きなさい」伯母は感情を隠すように、妙にかたくなな顔をしていた。自分はすぐに顔を洗いに行つた。不相変雲のかぶさつた、気色の悪い天気だつた。風呂場の手桶には山百合が二本、無造作にただ抛りこんであつた。何だかその匂や褐色の花粉がべたべた皮膚にくつつきそうな気がした。

多加志はたつた一晩のうちに、すっかり眼が窪んでいた。今朝妻が抱き起そうとすると、頭を仰向けに垂らしたまま、白い物を吐いたとか云うことだつた。欠伸ばかりしているのもいけないらしかつた。自分は急にいじらしい気がした。同時にまた無気味な心もちもした。Sさんは子供の枕もとに黙々と敷島を啣えて

いた。それが自分の顔を見ると、「ちとお話したいことがありますから」と云った。自分はSさんを二階に招じ、火のない火鉢をさし挟はさんで坐った。「生命に危険はないと思いますか」Sさんはそう口を切った。多加志はSさんの言葉によれば、すっかり腸胃を壊こわしていた。この上はただ二三日の間あいだ、断食だんじきをさせるほかに仕かたはなかった。「それには入院おさせになった方が便利ではないかと思うんです」自分は多加志の容体ようたいはSさんの云っているよりも、ずっと危あやういのではないかと思った。あるいはもう入院させても、手遅れなのではないかとも思った。しかしもとよりそんなことにこだわっているべき場合ではなかった。自分は早速Sさんに入院の運びを願うことにした。「じやU病院にしましょう。

近いだけでも便利ですから」Sさんはすすめられた茶も飲まずに、U病院へ電話をかけに行つた。自分はその間に妻を呼び、伯母にも病院へ行つて貰うことにした。

その日は客に会う日だつた。客は朝から四人ばかりあつた。自分は客と話しながら、入院の支度したくを急いでいる妻や伯母を意識していた。すると何か舌の先に、砂粒すなつぶに似たものを感じ出した。自分はこのごろ齧齒むしばにつめたセメントがとれたのではないかと思つた。けれども指先に出して見ると、ほんとうの齒の欠けたのだつた。自分は少し迷信的になつた。しかし客とは煙草たばこをのみのみ、売り物に出たとか噂のある抱ほういつ一の三味線の話などをしていた。

そこへまた筋肉労働者と称する昨日きのうの青年も面会に来た。青年

は玄関に立つたまま、昨日貰った二冊の本は一円二十銭にしかならなかつたから、もう四五円くれないかと云う掛け合いはじめた。のみならずいかに断つても、容易に帰るけしきを見せなかつた。自分はどうとう落着きを失い、「そんなことを聞いている時間はない。帰つて貰おう」と怒鳴りつけた。青年はまだ不服そうに、「じや電車賃だけ下さい。五十銭貰えば好いんです」などと、さもしいことを並べていた。が、その手も利かないのを見ると、手荒に玄関の格子戸をしめ、やっと門外に退散した。自分はこの時こう云う寄附には今後断然応ずまいと思つた。

四人の客は五人になつた。五人目の客は年の若い仏蘭西文学の研究者だつた。自分はこの客と入れ違いに、茶の間の容子を窺い

に行つた。するともう支度の出来た伯母は着肥きぶとつた子供を抱きながら、縁側をあちこち歩いてゐた。自分は色の悪い多加志ひたいの額へ、そつと唇くちびるを押しつけて見た。額はかなり火照ほてつてゐた。しおむきもびくびく動いてゐた。「車は？」自分は小声にほかのことを云つた。「車？ 車はもう来ています」伯母はなぜか他人のように、叮嚀ていねいな言葉を使つてゐた。そこへ着物を更あらためた妻も羽根布団はねぶとんやバスケットを運んで来た。「では行つて参ります」妻は自分の前へ両手をつき、妙に真面目まじめな声を出した。自分はただ多加志まへの帽子ぼうしを新しいやつに換えてやれと云つた。それはつい四五日前まえ、自分の買つて来た夏帽子なつぼうしだつた。「もう新しいのに換えて置きました」妻はそう答えた後のち、箆たんすの上の鏡のぞを覗のぞき、ちよいと襟もとを

掻き合せた。自分は彼等を見送らずに、もう一度二階へ引き返した。

自分は新たに来た客とジョルジュ・サンドの話などをしていた。その時庭木の若葉の間に二つの車の幌ほろが見えた。幌は垣の上によらめきながら、たちまち目の前を通り過ぎた。「一体十九世紀の前半の作家はバルザックにしるサンドにしる、後半の作家よりは偉いですね」客は——自分ははっきり覚えている。客は熱心にこう云っていた。

午後にも客は絶えなかつた。自分はやっと日の暮に病院へ出かける時間を得た。曇天はいつか雨になっていた。自分は着物を着換えながら、女中に足駄あしだを出すようにと云った。そこへ大阪のN

君が原稿を貰いに顔を出した。N君は泥まみれの長靴ながぐつをはき、外套がいとうに雨の痕あとを光らせていた。自分は玄関に出迎えたまま、これこれの事情のあつたために、何も書けなかつたと云う断りことわを述べた。N君は自分に同情した。「じゃ今度はあきらめます」とも云つた。自分は何だかN君の同情を強しいたような心もちがした。同時に体ていの好いい口実くひんしに瀕死ひんしの子供を使つたような気がした。

N君の歸つたか歸らないのに、伯母も病院から歸つて来た。多加志は伯母の話によれば、その後ごも二度ばかり乳を吐いた。しかし幸い脳にだけは異状も来ずにいるらしかつた。伯母はまだこのほかに看護婦は氣立ての善さそうなこと、今夜は病院へ妻の母が泊とまりに来てくれることなどを話した。「多加ちゃんがあすこへは

いと直すぐに、日曜学校の生徒からだつて、花を一ひとたば束貰つたでしよう。さあ、お花だけにいやな気がしてね」そんなことも話していた。自分はけさ話をしている内に、齒の欠けたことを思い出した。が、何とも云わなかつた。

家を出た時はまつ暗だつた。その中に細かい雨が降つていた。自分は門を出ると同時に、日和下駄ひよりげたをはいているのに心づいた。しかもその日和下駄は左の前鼻緒まえばなおがゆるんでいた。自分は何だかこの鼻緒が切れると、子供の命も終りそうな気がした。しかしはき換えに帰るのはとうてい苛立いらだたしさに堪えなかつた。自分は足駄あしだを出さなかつた女中の愚ぐを怒いりながら、うっかり下駄げたを踏み返さないように、気をつけ気をつけ歩いて行つた。

病院へ着いたのは九時過ぎだった。なるほど多加志の病室の外には姫百合ひめゆりや撫子なでしこが五六本、洗面器の水に浸ひたされていた。病室の中の電燈の玉に風呂敷か何か懸っていたから、顔も見えないほど薄暗かった。そこに妻や妻の母は多加志を中に挟はさんだまま、帯を解かずに横になっていた。多加志は妻の母の腕を枕に、すやすや寝入っているらしかった。妻は自分の来たのを知ると一人だけ布団ふとんの上に坐り、小声に「どうも御苦労さま」と云った。妻の母もやはり同じことを云った。それは予期していたよりも、気軽い調子を帯びたものだった。自分は幾分かほっとした気になり、彼等の枕もとに腰を下した。妻は乳を飲ませられぬために、多加志は泣くし、乳は張るし、二重に苦しい思いをすると云った。「と

てもゴムの乳っ首くらいじゃ駄目なんですもの。しまいには舌を吸わせましたわ」「今はわたしの乳を飲んでるんですよ」「妻の母は笑いながら、しな萎びた乳首ちくびを出して見せた。「一生懸命に吸うんでね、こんなになつて赤になつてしまつた」自分もいつか笑つていた。「しかし存外好きそうですね。僕はもう今ごろは絶望かと思つた」「多加ちゃん？ 多加ちゃんはもう大丈夫ですとも。なかに、ただのお腹下なかくだしなんですよ。あしたはきつと熱さかが下りますよ」「御祖師様おそしさまの御利益ごりやくででしょう？」妻は母をひやかした。しかしほけきよう法華經信者の母は妻の言葉も聞えないように、悪い熱をさますつもりか、一生懸命に口を尖とがらせ、ふうふう多加志の頭を吹いた。……

×

×

×

多加志たかしはやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小しょうひん品ひんにしたいと思つたことがある。けれどもうっかりそう言うものを作ると、また病気がぶり返しそうな、迷信じみた心もちがした。そのためにととう書かずにした。今は多加志も庭木に吊つつたハムモツクの中に眠っている。自分は原稿を頼まれたのを機会に、とりあえずこの話を書いて見ることにした。読者にはむしろ迷惑かも知れない。

(大正十二年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供の病気

———游亭に———

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 芥川龍之介
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>